

誕生から少年時代 ～手の不自由をバネにして～

1876年(明治9)11月9日、野口清作(後の英世)は農家の長男として生まれました。1歳半の時、囲炉裏に落ち左手に大火傷を負い、農業ができない不自由な手となつた清作のため、母シカは懸命に働き学校に通わせました。

寝る間を惜しんで働く母の姿を見た清作はがんばり、学校では優秀な成績を修め、先生の代理も務めました。そして、尋常小学校卒業試験の試験官であった生涯の恩師となる小林 栄の援助で、夢に見た高等小学校へ進学することができました。

清作は高等小学校の卒業を前に、会津若松の会陽医院院長・渡部 鼎により、左手の指を開く手術を受け、物が持てるまでに回復しました。手が使えるようになった喜びと医学のすばらしさに感動した清作は、医師を目指して会陽医院に住みこみ働きながら医学の勉強に励み、医術開業試験受験のため上京しました。

■ 清作が火傷を負った 囲炉裏

火傷をした清作が、左手の手術を受け、医学の素晴らしさに感動し医師になる決心をしたきっかけとなりました。清作の原点ともいえるところです。



■ 生涯の恩師・小林 栄

福島師範学校第1回の卒業生で、生涯にわたり子弟教育にあたりました。私立学校「猪苗代日新館」を創設、自ら校長となり、多くの指導者を育てました。英世の生涯の恩師であり、野口英世記念会の創設や、野口英世記念館の開館に尽力しました。



■ 床柱に刻んだ決意文

「志を得ざれば再び此地を踏まず」
1896年(明治29)秋、医術開業試験を受験するために上京する際に、清作は床柱に自分の気持ちを刻み込みました。医者になれなければ生まれ故郷には帰らないという強い決意が込められています。

■ ナポレオンは3時間しか 眠らなかつた。

清作は友人に「ナポレオンは3時間しか眠らなかつた。自分も睡眠時間を削って勉強する」と言っていました。



■ 左手の手術後の記念写真

左手の手術も無事終了し、退院の際に猪苗代から迎えに来た同級生の八子弥寿平とともに撮った記念写真。清作のもっとも若い時の写真です。

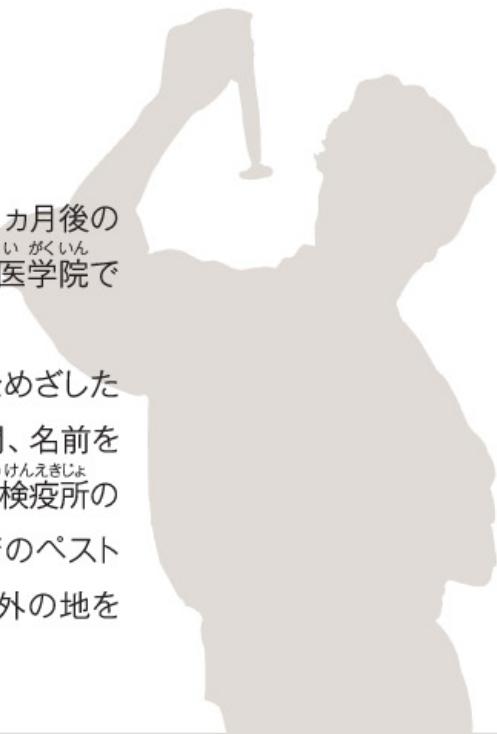


青年時代

～苦労して医学者になる～

1896年(明治29)医術開業試験受験のため上京した野口清作は、1ヵ月後の前期試験に合格、後期試験に向け、血脇守之助の好意により高山歯科医学院で働きながら済生学舎に通い、20歳で医師になる資格を得ました。

合格後は、高山歯科医学院や順天堂医院に勤めましたが、細菌学をめざした清作は、北里柴三郎が所長である伝染病研究所に入りました。この間、名前を清作から英世と改めました。北里所長の勧めにより新しくできた横浜海港検疫所の医官補となり、ペスト患者を発見する功績をあげるとともに、中国でのペスト防疫のために組織された国際予防委員会の一員として、初めて海外の地を踏みました。



■ 上京する英世

1896年(明治29)医術開業試験を受験するため、清作は家族などの見送りをあとに、鉄道が通っていた本宮まで歩いて行き、東京へと向かいました。



■ 生涯の恩人である 血脇守之助

血脇守之助は、生活に困窮していた清作の面倒をみました。血脇は高山歯科医学院の経営を任せられ、後に東京歯科医学専門学校を創立、歯科医学教育の発展に尽しました。



■ 伝染病研究所長 北里柴三郎

清作の語学の才能を認めた北里柴三郎は、海外からの来客の案内や、図書や手紙の翻訳などを任せました。英世にとって世界の最先端の知識に触れる良い機会でした。



■ 横浜海港検疫所 検疫医官補正服姿の英世

北里柴三郎の紹介で横浜海港検疫所に勤めた英世は、香港から来たアーミリ・ガルの乗組員にペスト患者を発見し、水際で日本への上陸を防ぎました。



■ 門番が教壇に立つ

つい先日までランプ磨きや始業の鐘を鳴らしていた清作が、高山歯科医学院の講師として教壇に立ったので、生徒たちはたいへん驚きました。清作は後に「これほど痛快なことはなかった。」と語りました。



■ 中国・牛庄での英世

国際予防委員会の一員としてペストの防疫のために中国・牛庄(現・瀋陽)に派遣された英世は、語学も堪能だったため、現地で重宝されました。予定の滞在期間を延長して防疫に努めました。

ノーベル賞候補になる ～単身渡米から世界的活躍へ～

1900年(明治33)、英世は、北里柴三郎の代わりに通訳と案内を務めたペンシルベニア大学のフレキスナー博士を頼り単身渡米、蛇毒研究の権威であるミッセル博士の指導のもと多くの成果を挙げました。1903年(明治36)デンマーク国立血清研究所に留学をし血清学を基礎から学び、その後の研究の基礎となる有意義な時間を過ごしました。

英世は、1904年(明治37)に帰米すると、ロックフェラー医学研究所の一等助手として迎えられ、梅毒スピロヘータの研究に取り組みました。1910年(明治43)には梅毒の血清診断を報告し、ついで1913年(大正2)には、梅毒の末期に発症する脊髄膜炎の患者の脳内に梅毒スピロヘータが存在することを発見しました。

これらの成果により、ヨーロッパ7カ国での講演旅行を行うとともに、ノーベル賞の有力候補になり、英世は世界から注目を集めることとなりました。日本では帝国学士院恩賜賞を受賞しました。

■ 恩師・フレキスナー博士

英世を助手に雇ったフレキスナーは、その後、ロックフェラー医学研究所の所長となり英世を迎えてくれました。アメリカでの生涯の恩師となりました。



■ フレキスナー博士の助手となる
突然訪れた英世にたいへん戸惑ったフレキスナー博士でしたが、英世の熱意を感じポケットマネーで私設の助手としました。



■ 野口研究室のスタッフ

ロックフェラー財団の豊富な資金力により、ヨーロッパの医学に負けない最先端の研究所を目指し優秀な人材が集められたロックフェラー医学研究所で、英世は1914年(大正3)には、正員となりました。



■ 野口はいつ眠るのだろうか

昼夜を問わず研究に取り組むため、研究室に泊り込んだり、自宅にも研究機材を持ち帰る英世にたいして、同僚たちは「野口はいつ眠るのか」とたいへん不思議がりました。

■ デンマークの恩師 トーバル・マッセン博士

マッセン博士に師事した英世は、血清学の研究手法を一步から学びました。年齢が近いこともあり、生涯にわたり近況や研究などを報告し、交流を深めました。その後、マッセン博士はデンマーク国立血清研究所の所長となりました。



■ 結婚当時のメリー

ニューヨークでの生活も10年になった頃、メリー・ダージスとの交際が始まり、1911年(明治44)4月10日結婚しました。メリーは研究に忙しい英世をいたわり、やさしく見守りました。



家族・恩師との再会 ～故郷への凱旋～

英世のもとに友人の石塚三郎から、母シカの写真と「万難を排して帰国せよ」とつづられた手紙が届きました。年老いた母の姿が写った写真を見た英世は、15年ぶりの帰国を決意しました。

世界的活躍をしていた英世は、日本各地でたいへんな歓迎を受け、忙しい2ヶ月間を送りました。母シカや恩師小林 栄夫妻、血脇守之助と一緒に全国各地に講演旅行をし、孝行を果たしました。

再渡米の際は、家族や友人とまたの再会を約束しましたが、それは叶わず、英世が日本の地を踏んだ最後となりました。

■ 故郷・翁島駅に500名の歓迎

1915年(大正4)9月8日

おきなじま
故郷の翁島駅に降りたつと、大きなアーチと歓迎ののろしとともに、500名を超える村の人びとが英世を出迎えてくれました。



■ 中田観音にお参りをする英世

1915年(大正4)9月15日

母シカは、英世の無事をいつも祈っていた中田の観音様に英世と一緒にお礼参りをしました。

(左より
母シカ、英世、小林栄)



■ 私のモットーは「目的・正直・忍耐」です

英世は母校の翁島小学校で講演を行いました。自分がモットーとしていることは「目的・正直・忍耐」であると黒板に書き子どもたちに伝えました。この言葉は今も猪苗代町内の小中学校の生徒たちの目標となっています。



(左より 案内役を務めた宮原八重子、母シカ、英世、小林栄夫人シウン)

■ 日本橋三越での母シカらとの記念写真

1915年(大正4)10月6日

英世は帰国の大好きな目的であった親孝行のため、母シカと小林 栄夫妻をお招き、一緒に東京見物をしました。完成間もない日本橋の三越を見学し、母とともに記念写真を撮りました。



■ 大阪・箕面の料亭・琴の家での親孝行

1915年(大正4)10月10日

大阪高等医学校長が開いた箕面の料亭・琴の家での宴会の席で、英世は母の横に座り、人目をはばかることなく世話をしました。英世と母の姿は、周りの人々の感激の涙を誘いました。

■ 大隈重信邸を訪れる

1915年(大正4)11月3日

おおくま
再渡米前日の11月3日には、総理大臣大隈重信を血脇守之助・小林 栄・石塚三郎らとともに訪れ、帰国の報告をし歓談をしました。



■ 再渡米に際し恩師・親友と

1915年(大正4)11月4日

2ヶ月間の短い滞在を終え再びアメリカに渡る英世を、恩師や友人など多くの人々が見送りました。



(左より 渡部 鼎・英世・石塚三郎・血脇守之助・小林 栄)

人類のために生き、 人類のために死せり

ロックフェラー医学研究所では、中南米で流行していた黄熱病の撲滅のため、現地に研究班を派遣しました。英世は黄熱病の患者からスピロヘータを分離しワクチンと血清をつくり、死亡率を改善させる成果をあげ、各国から大きな賞賛を受けました。

しかし、もう一つの流行地であるアフリカでは英世が作ったワクチンや血清の効果が現れなかったため、1927年（昭和2）10月、原因究明のために、周囲の反対を押し切って西アフリカ・黄金海岸（現在のガーナ共和国）のアクラに遠征しました。

英世は、3ヶ月の予定を半年に延ばし、研究に努めましたが、研究にめどをつけ、帰米しようとした矢先に自身も黄熱に感染してしまい、1928年（昭和3）5月21日、ア克拉で51歳の生涯を閉じました。

■ エクアドルへの上陸

1918年（大正7）6月、ロックフェラー医学研究所は、中南米での黄熱病撲滅のために、英世らをエクアドルのグアヤキルに派遣しました。



■ 名誉軍医監姿の英世

エクアドルでの英世の業績はたいへん評価され、エクアドル共和国の陸軍軍医監（軍隊の医者の高位）ならびに陸軍大佐（最高の地位）の名誉称号が授与され盛大な謝恩送別会が行われました。



■ ブラジル・オズワルドクルーズ研究所のスタッフと

エクアドルに続き、ブラジル、ペルー、メキシコへも遠征し、黄熱病の研究に努め人びとから歓迎を受けました。



■ ア克拉に上陸する英世

英世は、1927年（昭和2）11月18日、西アフリカ・黄金海岸（現在のガーナ共和国）のア克拉港に到着しました。実験用の動物と研究用機材とともに上陸しました。

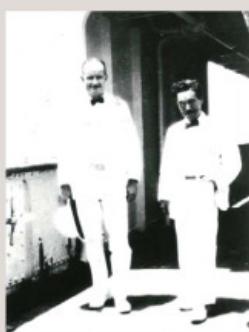


■ 信頼を寄せたマハфиー博士と英世

英世は、ア克拉でも不眠不休で研究に打ち込みました。多忙な英世の気晴らしにと同僚の国際保健部のアレクサンダー・マハфиー博士は、家族とともにピクニックに連れ出し、日ごろの疲れを癒してくれました。

■ 英世最後の写真

帰米の報告のためアメリカの研究拠点であるラゴスへ出張していた英世は、黄熱に感染しました。急いでア克拉に戻る途中のアッパム号船上で撮影された英世最後の写真です。この10日後に黄熱病により帰らぬ人となりました。



■ 英世が眠るウッドローン墓地

英世の遺体はアメリカに移送され、1928年（昭和3）6月15日にロックフェラー医学研究所で葬儀が行われ、ニューヨーク郊外のウッドローン墓地に埋葬されました。墓碑には「科学への献身により、人類のために生き、人類のために死す」と刻まれています。

